

「地域で生活する胃全摘術後がん患者の自己概念」

看護管理室

近藤 恵子

【目的】

本研究の目的は、胃がんにより胃全摘術を受け地域で生活する患者の自己概念が時間とともに変化していく過程を自己に対する認識を通して明らかにし、患者自身が自己概念を肯定的に修復していくための看護介入の示唆を得ることである。

【方法】

対象は術後2年までの胃全摘術を受けた初発で無再発の胃がん患者とした。所属大学と協力施設の倫理審査委員会の承認を得た後、対象者に研究内容や倫理的配慮についての説明を行い同意を得た。データ収集は半構成的質問用紙を用いた面接にて、対象者が術後経過において病前とは異なる自己を強く認識した時期から現在までに認識した自己の変化を語ってもらい、許可を得て録音した。面接内容の逐語録を指導者のスーパーバイズを受けながら質的帰納的に分析し真実性・妥当性の確保に努めた。

【結果】

対象者は11名（男性4名、女性7名、30～70歳代）で、6名が進行がん患者であった。がんの罹患および手術によって強いダメージを受けた自己概念は、時間経過および食の安定とともに、[心身が回復し元気を取り戻していく自分] [生活の安定を取り戻していく自分] という自己像を描きながら身体的・精神的・対人関係的・社会的自己概念の修復を図っていたことが明らかになった。一方、実存的自己概念は、がんの罹患による影響を強く受け、[生きることの不安を感じている自分] を意識しながら、[健康で人生を豊かに生きたいと願う自分] という自己像を描いていくことが明らかになった。

【考察】

胃全摘術後がん患者の自己概念は、身体的自己概念の修復を基盤に、自己概念の全体が修復されていくという過程を描いていた。看護者はソーシャル・サポートを強化しながら食の安定を図り、患者が自己への肯定的な気づきを得られるように関わる必要がある。また、再発の不安を抱えていくがん患者を理解し、実存的自己概念の安定が図られるように継続して関わる必要性が示唆された。

〔平成20年2月9・10日 第22回日本がん看護学会（愛知）にて発表〕